西王母から見る椿の系統

東京都　野口慎一

子房毛の観察

西王母は筆者の大好きな椿です。何よりも良いのは、花期が長く一輪一輪の花をゆっくりと長い間楽しむ事ができるからです。極早咲きであるため茶席に生ける、茶花としても重宝される西王母ですが、植物学的な意味では子房に毛のない日本の椿のなかにあって、子房に毛が生えていることが発見され、来歴不明のツバキと考えられる園芸品種の一つです。同じように子房有毛のワビスケツバキと関係していると考える人もある品種です。どうして子房が有毛なのかについても来歴がよくわからない品種であることから、かなり古い品種ではなかろうかと考え、筆者は江戸時代の初期からその名が記されている「日野」（椿花図譜　1700 頃）が本種のこととではなかろうかと推察しています。同図譜の写生画の花に西王母が大変よく似ているからです（写真参照）。

（椿花図譜の日野と西王母）

記録に無いほど古い時代から日本に色々な原種ツバキがもたらされていて、それが西王母のような不思議な椿花を生み出してきたのではないかと想像しています。もっと後に見知らぬ他国のツバキが導入されたのであったら、子房有毛な種が導入されていたという様な記録が何処かにありそうなものだと思うからです。古い時代から伝えられてきたいくつかの園芸品種の子房に毛が生

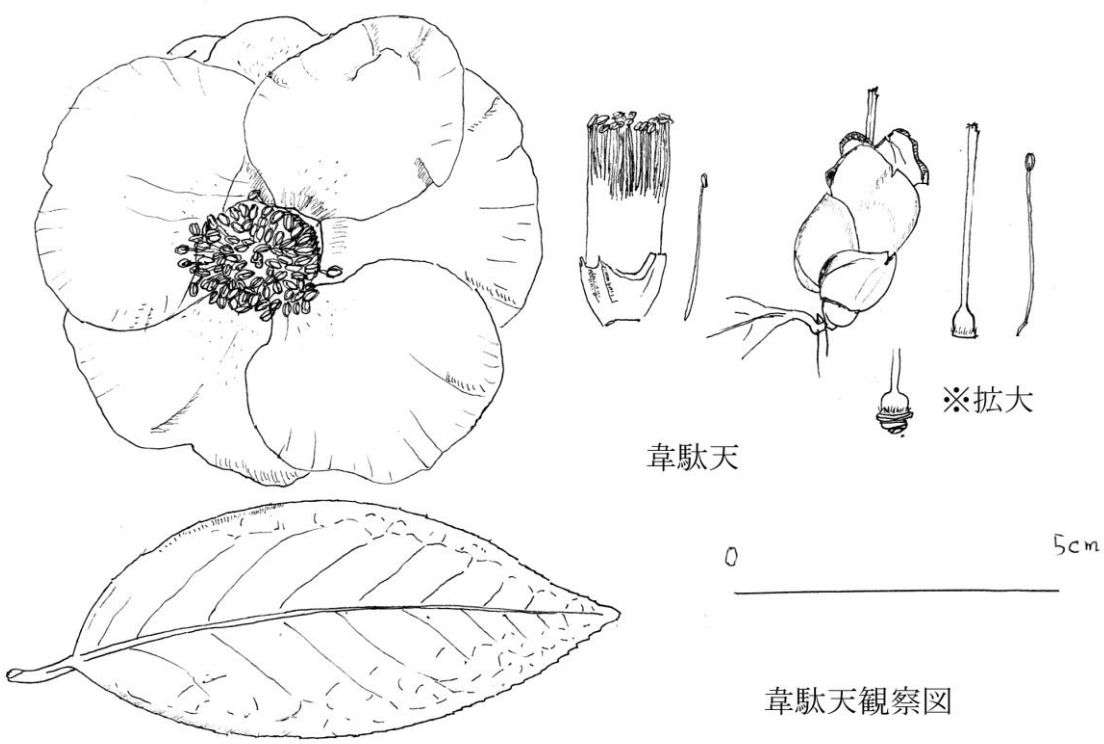
えている事などが、文献としては記述されていないとしても、そのような未知のツバキが関与した（交配した）証拠の一つと考えられています。

さて、西王母が侘助（ワビスケツバキ）なのか否かと言うことについては、意見が分かれることがあります。侘助をどのように捉えるかということについて、研究者などの立場によって全く違うものであるからです。園芸文化的な侘助は本来小蝶侘助のことで、この品種は花粉を出して尋常に咲く椿であるとされています。（百花椿名よせ色付　侘助の記述参照）侘助の蕊（侘蕊）は正常な形の花蕊です。江戸時代のどの古文書の色彩図でも黄色く雄蘂が描かれていることからもこのことは明らかです。

さて、植物学的な見方からすると、花粉を出さないで咲くことは雄性不稔と説明され、雄蕊が発達障害を起こしている一種の奇形ですから、これは退化ということではありません。侘助（ワビスケ）を種や変種と捉えるにしても、生殖器官を失うように退化させたら致命的で、その種は絶滅してしまいます。雄性不稔は遺伝的なものであるのですが、一重の花でも八重咲きの花に現れるものでも、花粉を出せないこと（葯や雄蘂を持たないこと）を退化という言葉で説明することは誤りだと思います。つまり植物学的な意味でも、ワビスケの花蕊についてこれを退化させたと考える事にも、また園芸的な意味でも侘助（集合名詞としても）が雄性不稔のおしべを持つものでなければならないとする考えにも反対です。

本小文は集合名詞としての**侘助**に大きく関係してしまいますが、誤解をまねかないように侘助という言葉はなるべく使わないようにしようと思います。ワビスケ（wabiske）は本来白侘助に与えられた変種名ですが、個々の園芸品種についても、例えば西王母や太郎冠者を（園芸文化的な意味でも、植物学的な意味でも）侘助（ワビスケ）とするかしないか、別の種とするかで研究者によって考えが分かれているからです。

さて西王母の子房の毛について筆者が考える事になった手がかりとなった園芸品種に韋駄天があります。この江戸椿のことはあまり知られていないので、観察描図を示します。



韋駄天観察図

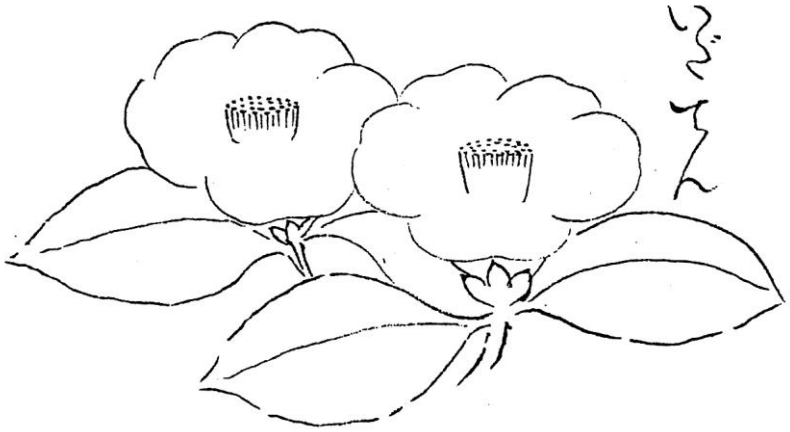
野口原図

この品種は 1980 年代に、筆者の父で、その当時の野口農園園主（野口修司）が川口市の古い園芸農家（椿花園）から譲り受けた品種です。野口が聞いてきた事によると、その直前まで韋駄天という品種は一時所在不明になっていたのですが、同園には以前に韋駄天を販売していた記録があり、その販売記録を頼りに園主が納品先に訪ねて行った所本品種を見つける事ができたとの事でした。まさに秋から咲く早咲き一重の花で韋駄天に間違い無いものだということでした。（ある植物園で韋駄天の札のついた品種は筆者も見たことがありましたが、それは八重咲きの花で、明治時代の椿のカタログ「椿花集」（1879 早咲き之部白一重中リン）の記述と違っていて札違いでした。）

筆者が本種を育ててみると、確かに十月から咲き出します。葉や樹姿も類似の白一重の知られている品種とは違っていました。花は独特なもので、白蕊（雄性不稔）の雄蕊群（ゆうずいぐん）をしています。同園はその後、椿の生産をやめてしまっているということで、大変に貴重な江戸椿だと思い、「日本ツバキ・サザンカ名鑑」（1998）に上記の来歴を書いて　投稿しました。さらに、「最新日本ツバキ図鑑」にも、別の咲き始めの花の写真を添えて再度投稿しました。私の報告した伝承や来歴などに沿った説明は二度共掲載されなかったためでした。写真は採用されましたが、野口が一人で本品種に韋駄天の名前を当てているとしています。しかも、本種の特徴が古文書と齟齬があるから異種であると断定されています。つまり「本草花蒔絵」（1739）の記述と花形が全く違うと説明されているのです。「キキョウの如く壺咲き」ではないから古い本物の韋駄天ではないとしているのです。正

当な理由なく古品種の名前を用いているというのです。

本草花蒔絵には図が登載されていています。図を示します。はたして、ご覧のように普通の一重の花形に描かれています。



本草花蒔絵登載図：いだてん

確かに同書の記述に「きき屋うのごときつぼさき」とありますが、開いた花の絵は桔梗の形を残していません。普通、筒咲きの花の咲き出しは花弁が中折して桔梗のようになるものです。開き始める一重の花はみんな壺のような形になるもので、そのような形で咲き出さない花はありません。古文書の記述は見方にもよるのです。同書には卜伴も記載がありますが、卜伴の花形の説明も「花形つぼさきひとえ…」と始まっていて、ペタロイド部も白色とは言っていません。正当とされる品種でも花の説明など今と違っていることは珍しくありません。他の特徴などは古品種の記述と一致しているのに、それを無視して花形の表現が違っていると言うだけで、本種が異種と言うのであれば、今日、卜伴を壺咲きなどという人はいませんし、唐子のはずの花心部は登載図では普通のおしべのように描かれていますから、同書の卜伴も異種という事になります。このように古文書などを調べても、本種が昭和時代の新撰椿花集（椿花園）に引き継がれた由緒正しい江戸椿の韋駄天であることを疑う余地はありません。

さて、本種の雄蕊の葯は咲きはじめ白く、あたかも花の大きな白侘助を見るようです。「しんぐり」という別の呼び名があったと剪花翁伝で説明されている白侘助と同じ咲き方です。（写真参照）しかも、注目すべきことに子房には少し毛が生えています。（写真１参照）

（写真１）韋駄天の子房　子房元部の毛

韋駄天の花

写真 1 のように子房の下の方にだけ毛が生えています。この点にも注目しました。このような子房の毛の生え方は西王母とそっくりな毛の生え方だからです。戦後の江戸椿のブームのなかで知られていた古い園芸品種は数多くありましたが、この様な西王母型の子房有毛品種は他にありません。その歴史的意味でも植物学的な意味においても大変貴重な古品種という事ができます。

そこで、筆者は西王母の実生も調べて見ました。筆者の発表した西王母と関係ある品種は３品種ありますが、ひとつは西王母を父にした銀座（(百合絞り×西王母)、残りは西王母の実を蒔いた吹雪妙蓮寺（一重碗咲き小絞り大輪　写真２）冬桜（後出、写真 12 参照）です。

（写真2）吹雪妙蓮寺の花　曙や紅妙蓮寺に似る花形、碗咲き大輪極早咲き 西王母の自

然結実を蒔いたものから選別。

３品種のうち２品種は子房に毛が生えていませんでしたが、吹雪妙蓮寺には西王母より多いかと思える程に毛が生えていました。全くおなじように子房の花托に近い部分にだけ生える生え方です。子房の横部より上には毛がありません。

さらに他の西王母の実生も調べて見ました。すると、三系統の交配実生、西王母×加賀侘助（桃色一重中輪花の子房　写真３）、西王母×大杯（紅八重大輪　写真４、５）、エディタエツバキ×西王母（桃色一重中輪　　写真６、７）に同じように子房の元に毛が生えていました。

（写真3）西王母×加賀侘助 （桃色一重中輪花　 花の写真は省略）若い果実の毛

結実して太ってくると毛の生えている部分がよく分かる。小さな子房の毛は写真で撮る時は反射して光るものしか映せない。

（写真4）西王母（子房元毛）×大杯（子房無毛）の花

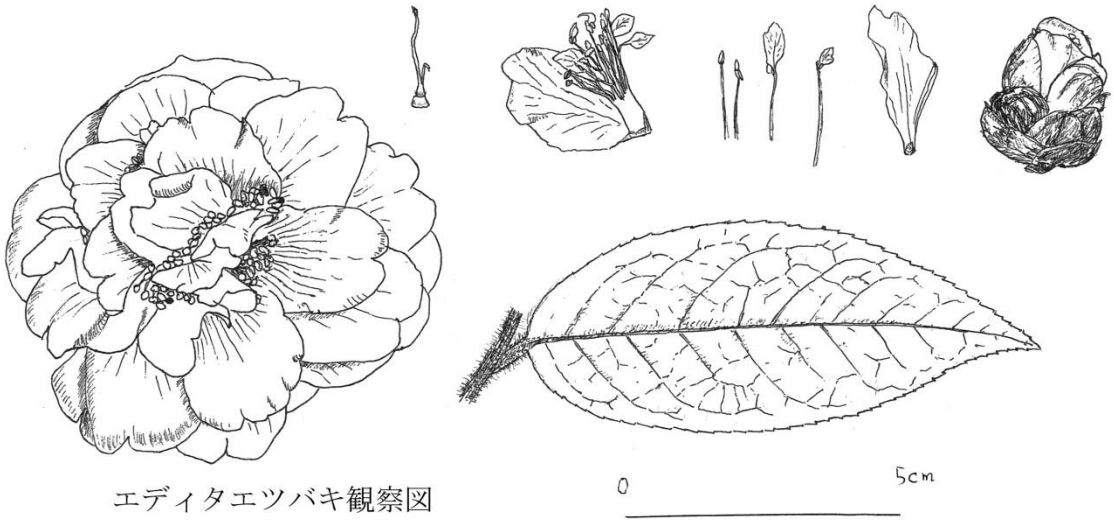
（写真5）西王母×大杯　若い果実
若い果実の毛、元にだけ生えている

（写真6）エディタエツバキ×西王母の花
枝葉は無毛でエディタエツバキに似ない。

（写真7）エディタエツバキ×西王母（父系）**子房毛**

どの組み合わせの交雑種も西王母の母系稔性が悪いためか、また母系のエディタエツバキが八重咲き品種のためかそれぞれ一個体しか実生が得られていません。交配が難しいのです。加賀侘助は子房に密毛のある品種で、西王母と血縁関係があるのではないかと推測する人もいます。また大杯は初のアザレアツバキの交雑種で子房は無毛です。

八重咲きエディタエツバキの花は江戸椿の古品種の紅車が散り蘂で咲く時の花と大変良く似た花形、花色で、枝葉に長い毛が生えている中国原産の特異な種です。また、萼が、焦げ茶色で大きく、花が終わったあとも落葉しない特徴があります。（西王母もしばしば同じように萼を宿存します。）本種とこの西王母との交雑種の花の子房の観察結果（写真７）に驚いて、改めて詳しく八重咲きエディタエツバキを観察してみました。観察図を示します。



エディタエツバキ観察図

野口原図

エディタエツバキ（中国名：尖萼紅山茶）の一重咲きの基本種は、行方不明とも言われていて知ることができていません。また八重咲きの本種の子房の毛については詳しく観察されていないようです。「A REVISION OF GENUS CAMELLIA」の挿絵（基本種）は子房が無毛で描かれています。記述は子房の外面毛は「綿毛（tomentose）あるいは無毛あるいは僅かに毛あり」となっています。この八重咲き種は観察図のように子房は小さく八重咲きの個体であるために雌蕊が変形していることが多く子房も観察しにくいものでした。いくつかの花を見ましたが、どの花の子房も僅かに元部にだけ毛が生えていました。西王母と同じ子房毛の生え方でした。

子房表面毛のタイプ

このように韋駄天の子房の毛の発見から観察を続けたところ、西王母との実生にも西王母と同じような子房毛の生え方のものがいくつも見られました。葉姿などがあまり西王母に似ていませんから、韋駄天が西王母と直接関係しているかどうかはわかりませんが、関連性を感じさせることでした。実際、西王母の実生によるとわかっている園芸品種は子房無毛のものが多く、私の実生でも珍しくもありません。そのことは他の子房無毛の園芸品種との交配と考えられますから誰も不思議に思わないでしょう。自然交配によればほとんどが無毛のツバキの交配によるものですから、実生では子房の毛は発現しない、消えてしまう事と考えられます。

また、子房に少し毛が生えている白侘助や小蝶侘助が全面多毛種（トウツバキ、サルウィンツバキ、ピタールツバキなどと想定する人がいる）と無毛種（ヤブツバキ）との交配種であるとすれば、西王母も中間雑種による連続的な個体変異の中にあるかも知れません。

しかし、多毛種である加賀侘助との交配実生にも西王母型の子房毛を持つ実生が現れたことからも、この子房元毛型はある程度強い遺伝性を持っていると想像出来ます。またこの型の有毛原種ツバキ（エディタエツバキ）が認められたことからも、子房の下部にだけ毛をはやす、子房元毛型は中間性のものではなく一つの個別の類型と考える事もできます。この考え方に従って、ここではこれらを別々のタイプに便宜的に分けてみました。

栽培品種のうちもともとは野生品ではないと考えられる、園芸品種は、子房の表面毛が全面に多く生えるタイプ（太郎冠者型　密毛型)、子房の横部に毛が多く子房の先に毛のないタイプ（白侘助型　子房横毛型）と子房の元に毛が多く横部より上に毛のないタイプ（西王母型、子房元毛型）および無毛の４タイプに大別できます。（後に示す模式図参照）多少机上の空論のようですが、次に述べることのために話を先に進めます。

室内毛の観察

さて、子房の外側表面の毛（室外毛）とは別に、一部の原種ツバキには、子房の胚珠を収めている室内壁面に毛（室内毛）が生えていることが知られています。筆者らが直接ベトナムから導入

したキバナカイドウツバキやカイドウツバキ（ハイドゥン）などについても、観察してみました。その結果、室内毛が生えていることが確認されました。また従来から日本に導入されている他の種についてもこの室内毛が生えているものがあることも確認できました。また、知られていないかもしれませんが西王母や下記の園芸品種にも室内毛が生えています。

室内毛のある原種ツバキと園芸品種の名簿（筆者発見確認）

アンプレキシコウリス（ハイドウン）、キバナカイドウツバキ、大金花茶、小果金花茶、金花茶、凹脈金花茶、直脈金花茶、フスイエンスシス、（以下室外毛あり） ビダリー、クエフォンゲンシス、ホンコンゲンシス。

加茂本阿弥、嵯峨本阿弥、隠れ磯、沖の島、摺墨、銀座、白玉、玉錦、玉風、大日の曙、糸飾り、小玉錦、曙、黄鳳、初黄、黄加茂本阿弥、曙、本阿弥錦、多摩天の川、出羽大輪（太平楽）、黄月、紅梅、正義、玉霞、宝の華、日本の誉、冬桜、（以下室外毛あり）西王母、加賀侘助、白侘助、雛侘助、吹雪妙蓮寺、明日香黄、黄笑顔、月光錦、月影（フラバx黄鳳） 姫海堂椿 。

一部のものについて、子房の断面写真（写真8、9、10、11）を参照してください。

金花茶の子房（写真8）胚珠と室内毛が見える。

白侘助の子房（写真9）
子房外面の花托に近い部分に毛が無く、横部側面に毛が多い。室内毛も生えている。

西王母の子房（写真 10）
部屋の断面　西王母の室外毛はスカート状に広がる子房元部にだけ生えている。子房の内底部に室内毛が見えている。

正義の子房（写真 11）
室内毛は少ないが生えている。

江戸椿はヤマツバキやサルイワツバキ（ユキツバキ）が交配することによって発展してきたと言われていますが、筆者は、この日本の古い園芸品種の成立に何種類もの他国のツバキが関係しているのではないかと考えて、その状況的な証拠として、一部の園芸品種についてヤマツバキなどとは違う形態的な特徴があることや、実生発生の様子など植物学的な観察の報告をしてきました。古文書などに描かれたツバキについてもこの観点からの考察をしてきました。その私説のもう一つの状況的な証拠として、ここに述べた室内毛の観察を挙げることができます。この室内毛は日本のツバキにはないことから、室内毛を持つ何らかの他の種がそれらの成立に関わっているのではないかと想像しているのです。

私は西王母の実生などもこのように植物学的な観点から見ているのです。そうすると、その実生群のなかにも子房の室内毛が生えているものがあることに気が付きました。 先にも述べたように、私は西王母の実生品種を発表してきました。銀座（百合絞り×西王母）、吹雪妙蓮寺、冬桜です。吹雪妙蓮寺と冬桜は西王母の自然結実したものから育てたものです。3品種の内、銀座（西王母父系の品種）と冬桜は子房室外毛が生えていません。しかし、3 品種のどれにも室内毛が生えているのです。（写真 12　冬桜の室内毛　参照）

（写真 12）　　冬桜の花

（写真 12）冬桜の子房　子房の断面　外壁面毛はない。 室内壁面毛は生えている。

これらのことから親である西王母の形質である室内毛は父系でも母系でも遺伝することがあることも、またこの時、西王母以外の室内毛のある品種が交配しているとしても、子房室外毛と必ずしも連動しない事も慥(たし)かめられました。命名発表などしていない私の西王母の実生には室外毛もなく、全く室内毛も認められないものもありました。室内毛は必ずしも発現するほど強い性質の形質では無いとは言え、ヤブツバキ系の園芸品種に対して子房表面毛と同じようにある程度の強さの遺伝傾向があると言えそうです。

西王母と直接関係のない原種ツバキの交雑種について、命名発表していないものの観察についても同じようなことがいえます。私が確認できた、フラバ、ホンコンゲンシス、クエフォンゲンシス（いずれも室外毛、室内毛を両方持つ）の無毛園芸品種（ヤマツバキ系）との交雑実生については、具体的には写真など用意していませんが、第一代の雑種には室外毛、室内毛の両方の毛が現れてきています。

また別々の種によると思われるような子房毛の実生には別々の親の両方の形質をもつことがあります。薄黄色八重咲きの明日香黄は母種が金花茶（室内毛）で　父種がラスカビューティー（トウツバキ系室外毛あり）の実生ですが、子房の外面毛も室内毛も持っています。また、サザンカ系統の金花茶交配種、黄笑顔は、室外毛（笑顔由来）があり、室内毛（金花茶由来）も持っています。

椿の系統を探る

園芸品種や原種ツバキについて、子房表面毛（室外毛）と子房室内毛の関係を模式的な図を示して報告します。園芸品種の成立について、別の種が関係していると想定した場合の系統的な考察のために重要な観察だと思います。

模式図（子房の断面）　子房毛の8タイプの関係

室外毛	室内毛なし	室内毛あり
無毛型	園芸品種多数 ヤマツバキ、ユキツバキなど	白玉、加茂本阿弥など 金花茶、ハイドゥンなど
側毛型	小蝶侘助	白侘助
元毛型	韋駄天 エディタエツバキ	西王母 、吹雪妙蓮寺
全面毛型	太郎冠者、数寄屋など ピタールツバキ、 トウツバキなど	加賀侘助 ホンコンゲンシス、フラバ など

hair types of ovary

なお、西王母や白侘助などの子房室外毛も多く生えるときもあればほとんど生えないときがあります。園芸品種などの室内毛は、室外毛と同じように室内毛の数量も不定で、極少ないことも生えていない（見えない）こともあります。また園芸品種は比較的に毛が多い品種と少ない品種があります。原種ツバキについても系統によっては筆者の観察と違うことはあると思います。挙げた品種名は少なくともわずかでも生えていたもので、時には生えていない子房を見たものも含まれています。

さて、このように西王母の観察に端を発して、西王母自身の成立に関わる知見を得ることができました。さらに園芸品種や原種ツバキの観察によって、江戸椿全体の成立に関わる植物学的に別の系統があることが推測できました。子房毛はツバキのいくつものセクションにわたって多くの種に共通する形質であると言えます。また子房室内毛を持つ種が実際に関わっていることがわかっている現代の新品種や実生にもこの室内毛が遺伝していることも確認できました。

このように子房毛の生え方から見ても、最も複雑な植物学的な特徴を備えているものが西王母ではないかと筆者は考えています。西王母についての植物学的な解明は、江戸椿全体の成立についての系統的な謎を解き明かす鍵になるかもしれません。

椿花図譜の日野（日野早咲）が筆者の想像しているように西王母であるとすれば、それは百椿集（1633 安楽庵策伝）の日野殿椿ということになります。日野殿椿は日野資勝卿の指導によって京都の仙洞御所で実生によってできたと記されています。はたして西王母はどのようなツバキの子供であったのでしょうか。

（江戸椿研究会委員）